

理学部41年生

後 藤 英 一 (情報科学教室)



理学部物理学科の旧制最終組に筆者が入学したのは昭和25年、19才であった。それ以来41年にわたって理学部にお世話になった。旧制の大学は3年制で入試は各学科が、独立に行い、学生は理学部に直接入学した。現在の新制の大学では、理学部への進学は最短で20才になる。大学への入学年齢下限を諸外国並みに下げない限り、理学部41年生はもうでないわけである。旧制物理学科1年生の教室は木造で今の東大出版会の隣りのテニスコートにあった。またアートコーヒーのあたりには真空などの学生実験室があった。

理学部の教授会には昭和34年に助教授となった時から出席させていただいている。例年の退官教官のご挨拶の中で最も感銘をうけたのは、卒業研究以来ずっとお世話になった故高橋秀俊教授のものであった。うっかり言うと選挙されるといけないので今日までいわなかったが、人事委員や会計委員にはなりませんでしたというものであった。これに返して筆者は江上学部長のとき、会計委員長を務めた。美濃部都政により、大学など大口水道料の値上げがあって、理学部の水道料が1億円を超えてしまった。学部長から何んとか考えろと言われて、物理の冷却水を循環式に改良するよう

にした。その後歴代の会計委員会の節水対策により、水道料金は約半分になった。しかし都知事も変わったのだから全学の問題として、水道料金の値下げを都と交渉してみたらいかがであろうか。近年はシンガポールとの国際交流委員、全学国際交流委員を拝名し、藤田、和田、久城の3代学部長のお伴をして3年続けてシンガポールを訪問した。シンガポールとはこの外にも縁があって、2名の研究員を日本に招いたりして、ジョセフソン計算機につき共同研究を行い、盧氏には1983年、丘氏には1991年にそれぞれ理学系から論博を授与していただいた。いずれの場合も、最初は筆者がシンガポールを訪問して共同研究員として一緒にやれる確信を得てから招へいた。

筆者の研究テーマ、パラメスロン計算機、可変断面電子電充法とジョセフソン計算機素子はいずれも応用的なものである。朝日賞、紫綬褒賞などの受賞も発明に対するものである。純粋に理学的興味からの研究はマグネチック・モノポールの研究ぐらいしかない。

停年後、教育面では神奈川大学理学部情報科学科で講義する予定である。研究面では超高速計算機の構成法を続けたいと思う。また、大脳生理学の第1人者・理研フロンティアの伊藤正男先生に弟子入りして、脳機構のモデル化の研究にもふれたいと思うが、60の手習い自信はない。